



「寛容の精神こそ、 ロータリーに不可欠ものである」

国際ロータリー第2510地区

2011-2012年度 ガバナー **熊澤隆樹** (小樽RC)

会長・幹事の皆さん、この一年間ご苦勞様でした。この月信が、年度内の最後のメッセージとなります。7月よりスタートして、公式訪問、月信を通じて、バネルジー会長のテーマをどれだけ伝えることができたか、自分の力のなさを実感しております。そしてクラブの現場の声を聞き、これまでのR Iの方針がうまく伝えられていないことを感ずる一年間でもありました。それは国際ロータリーがポリオ撲滅に象徴される外向けの奉仕活動に力を注いでいたことにも大きな原因であることと考えられます。今年5月のバンコクでの国際大会の本会議の挨拶でノエル A. バジャット R I 副会長は、各クラブの意思が R I 理事会を動かすとはっきり明言しており、田中作次 R I 会長年度の R I の変化が楽しみです。

1月号の月信でも紹介したように、ロータリーの独自性について、ポール・ハリスは自伝の中で「ロータリーは長年にわたって一定の方針をとってきている。…ヨーロッパのクラブはアメリカの中にはじめは認めなかった価値を今は発見している。」——これは、1914年、イギリスに結成された R I B I (グレートブリテン及びアイルランド内国際ロータリー) をさしていると思われ、1922年には管理上の地域単位と認められております。——

そこで、日本のロータリーもアメリカと違った価値観を持つことが認められるべきでロータリーの目的は同じでも、具体的方策はアメリカ (R I の中心的存在) の考えるものと当然違っていても良いはずで。これは、東京 RC の創立時のメンバーの社会的地位が、シカゴで誕生したロータリーのメンバーのそれと違っていることによる生い立ちが生じたことによるものが、大きいのではないかと考えてなりません。そこで、ロータリーの目的は同じでも、方策が違った方が、日本のロータリーを元気にするのではないのでしょうか。田中作次 R I 会長年度には、このことが見えてくる方向づけが生まれればと期待するものであります。

私は、R I の戦略計画を日本的に表すと、私見ですが

- ① クラブ例会は、会員の人生哲学を学ぶ道場である。
- ② 奉仕は、仏教の言葉、四無量心 (慈悲喜捨) の愛の心の実践の場である。
- ③ 奉仕活動は、「積善の家に余慶あり」の心で行うものである。

とすると、日本のロータリーも少し元気が湧いてくるのではないのでしょうか。

さて、今月はロータリー親睦月間にあたり、ロータリーの親睦について少し触れてみたいと思います。ロータリアンの友情・寛容は、会員の親睦には大切なものであり、『親睦は、ロータリーがその上に建てられた礎石であったし、寛容はそれをしっかり結合させる成分である。…わが祖父の一生を特徴づけてもいた。そしてそこからこそ、私の信念が生まれたといえる寛容の精神こそ、ロータリーには不可欠なのである。』とポールは「わがロータリーへの道」で述べております。

最後に、その最終ページを紹介して私のメッセージを終えさせていただきます。

神よ、人の短所や国の欠点は目に入らないように、
長所や良いところだけが目に付くようにお守り下さい。